信濃教育

巻頭言

教師のくらし

「教育とは、はかないものだ。力の弱いものだ。これは私の三十七年間の教師の体験からえた身に染みての実感であると共に、一つの決意でもある。」

これは、藤本三郎先生が、ある教育学者（実践家）の言葉として、紹介している言葉だ。

その子のためによかれと思い、少しずつ積み上げてきたことが、一瞬にして崩れ去ることがある。振り出しに戻る感じである。その子の悲しみや苦しみを、なんとかしたい、どうにかしたいと思えば思うほど、何もできない自分を自覚し、情けなく思うことがある。できることは、祈ることだけである。教育とは、はかなく力の弱いものだ。そう思いながらも、子どもたちのために一歩を踏み出す。そうやって多くの先輩たちが教職の道を歩いてきた。そして、今日もまた多くの教師が学校で奮闘している。

確かに教育ははかなく、力の弱いものである。しかし、子どもたちが幸せに生きる原動力になったり、よりよい社会を作る基盤となったりし得るのもまた教育である。人間が劇的に変わることなどあまりない。けれども、かすかな進歩を子どもたちの中に見たり、ささやかな変化を子どもから感じたり、小さな覚悟を子どもたちの表情から気づいたりできるのは、子どもたちに限りない関心を寄せている教師である。そして子どもたちの「かすかな」「ささやかな」「小さな」を、喜び合うのもまた教師である。

教育に確かな方法などあるはずもなく、正しいと思うことを、精魂込めて行うしかない。そして、そんな行いも次の瞬間には、更新を余儀なくされる運命にある。そうやって日々暮らす先に、子どもたちの笑顔がきっとある。そんなくらしが教師のやりがいなのかもしれない。

新年度が始まる。子どもたちとの出会いが待っている。

（信濃教育会会長　武田　育夫）

信濃教育

巻頭言

「学び」のプロセス

中学生のあるクラスは、アフリカ内陸部の夜は寒く、子どもたちが震えているということを知り、アフリカに毛布を送ろうと考えた。毛布は、地域の人にお願いして、家庭で使わなくなったものを集めて送ることとなった。一週間前にお願いのチラシを配り、お礼の言葉など練習をして、いよいよ毛布集めに出かけた。

Aさんの日記である。

「最初の二軒の家では、『頑張ってね』と言って、毛布などを出してくれてとても嬉しかった。三軒目に行った家は、ちょっと体の具合悪そうなおじいさんが出てきました。昨日クラスで練習したように、活動について説明した後、『この間お願いしてありましたように、もしいらない毛布とかがありましたらお願いします』と、お願いをした。そしたらそのおじいさんは『自分の生活だけでも精一杯なのに、人にやるものなんてあるわけがない』と、怒ったように言いました。なんだか、とても悲しくなりました。」

アフリカで寒い思いをしている人のために始めた活動。よいことを行なっていると信じていた活動。しかし、現実はもっと複雑であった。この活動は何のためなのか、わからなくなった。Aさんは深い問いを持った。

二十年近くを経てAさんは語る。

「十四歳の子どもがドキドキしながら扉を開けたら、すごい怒られて長い間説教されて、あー傷ついたなあってなったんだけど、それで得たものもいっぱいあって。みんないろいろ事情があって…。いいことばかりでなかったので、いろいろな人のこと考えられるようになったかな。」

人が学ぶということはどういうことなのだろうか。この世の中は、社会も自然も複雑怪奇だ。一筋縄ではいかない。何かを知ることは、膨大なわからないことの入り口でしかない。Aさんは、「わからないことが連続していくプロセスが『学び』だ」と語ってくれたように思える。

（信濃教育会会長　武田　育夫）

信濃教育

巻頭言

ユーモア

毛涯章平先生の講演をメモをしたものを私は大切にしている。

その一つに、ドイツの教育哲学者Ｏ・Ｆ・ボルノウの『教育を支えるもの』を基に、円熟した教師の要件を説いたものがある。「清明」「ユーモア」「善意」「忍待」の四つである。それぞれを詳細に説明する紙幅はないが、「ユーモア」のみ説明する。「子どもの小さな悩み事を、ある一定の高みから余裕をもって眺め、それを軽く受け流すことによって、子どもの緊張と苦悩を解きほぐす能力」と毛涯先生は説明された。

校長になってすぐに、私の「ユーモア」の力が試される場面がやってきた。その朝、私は校長講話で、決まりや約束について話をした。一人で自転車に乗って遊んでいると、自由に走り回れるが、二人になると、ぶつかってしまうことがあるから、近くに来たら声を出すとか、同じ方向に回ろうとか、安全に乗るために決まりや約束が必要になる。三人、四人と増えていけば、もっと必要になるかもしれない。決まりや約束は皆さんが安全に楽しく学校で生活をするためにあるんだよ、と絵などを用いながら話をした。

給食の前である。五年生の女の子が校長室にやってきた。昼の放送当番で、今日の校長講話について連絡する子だ。そして、私に聞いたのだ。

「校長先生、今朝の自転車のお話ですけれど、結局何が言いたかったのですか。」

その日は、研究授業があり大学の先生が一緒におられ、にやにやしながら成り行きを見ている。私は少し焦り気味に、それはね、と何のおもしろみもない説明をした。先生は少し興ざめしたかのように、私には見えた。

私は、人生においてもう一度やり直したい場面をいくつかあげろ、と言われたら、一つには間違いなくこの場面を入れる。もっと楽しく、軽やかに、そしてその女の子が笑顔になるような対応ができなかったものか。まったく「ユーモア」のかけらもない私の対応であった。

教師は実践家である。理屈が言えてもだめだ。まだまだだめだ、と思った出来事であった。

（信濃教育会会長　武田　育夫）

信濃教育

巻頭言

途中

その学級は、織物に取り組んでいた。小学三年生である。子どもたちは市内の体験工房で大きなマットや帯を見つけ、自分たちも大きな織物を作ることに挑戦してみたくなった。二人の子どもは大きな壁掛けを作ることにした。目指す壁掛けは一m×一・五m、目を細かくしてきれいに織り上げたいようだ。経糸（たていと）は一cm間隔ほどに張った。そこを丁寧に古布で作った緯糸（よこいと）を通していく。細かな作業だ。そんな作業を二人は黙々と行う。会話はほとんどない。一時間集中して作業をしても数cmしか進まない。気の遠くなるような作業だ。うまく織れていないときは惜しげもなく解き、また振り出しに戻る。

そういう二人の作業は数ヶ月間続いた。ほとんど完成したある日、二人は次のような会話をした。

「もうすぐ完成だね。」

「このころは、綜絖（そうこう）（緯糸を通すために経糸を上げさせる道具）がうまくいかずに、なかなか進まなかったよね。」

「大変だったよね。最初の方ってちょっと折り目がゆるかったんだね。」

「でも、いい感じになったよね。」

自分たちの織ってきた壁掛けを愛おしそうに撫でながらの会話である。一mほどの壁掛けは、この数ヶ月の二人の歴史でもあるのだ。

二人の数ヶ月にわたる作業は何なのだろうか。何かを成し遂げたわけではなく、何かを解決したわけでもない、ただ黙々と緯糸を通す時間の積み重ねである。そこには、効率とか能率とかいう大人の理屈は存在せず、ただただ、自分たちの織物の完成に向かう圧倒的な「途中」があるだけである。そして、教師もまたその「途中」を受け入れて、そこに身を置いてきた。「待った」のである。

「本当の教育というものは、回り道をさせることだ」は、木村素衛の言葉である。

（信濃教育会会長　武田　育夫）

信濃教育

巻頭言

ザリガニ

信濃教育会が主催する「今を生きる子どもの絵展」において、令和二年度（第三十四回）永年保存作品となった内藤衣織さん（中込小学校一年）の作品である。「はさみが大きいザリガニ」と題されたこの作品を、私は毎日見ていた。審査員の先生のコメントに「まるでこちらに向かってくるような迫力」とあるが、コメントもまた見事である。

私はこの絵を見ていていつも思うことがあった。それは、この子にはザリガニはどのように見えていたのだろうか、ということである。この絵は左右のはさみが異様に大きく描かれているが、この子の目にはこのように見えていたのではないかと思うのである。小学校の廊下に大人になって立ったとき「あれ、こんなに狭かったかな」と感じたことはないだろうか。子どもの時は、この廊下はもっと広く、天井は高く、大人とは違う世界を見ていたのではないか。この子の見ている世界は、教師を含めた大人の見ているものと違うのではないだろうか。

そう考えると、「バランスを考えなさい」とか「もっとよく見て描きなさい」といった助言は、この子にどのような意味があるのだろうか、という問題意識が生まれてくる。絵の指導に限らず、往々にしてこのような助言をしてしまうことが私たちにはある。大人の見ているものを、子どもも同じように見ていると思い込んでいるからだ。

この問題意識は、子どもたちは何を、どのように見ているのだろうか、子どもたちはどのような音を聞き、何を感じているのだろうか、といったことを知りたいという強い衝動を生む。もっと子どもの世界を知りたいと。それなくして、どうのような助言をするのか、どのような教材を用意するのか、どのような学習場面を作るのか、などなど指導の仕方が見えてこないからだ。

信州の教師たちが子どもに強い関心を寄せてきた理由がここにある。

（信濃教育会会長　武田　育夫）

信濃教育

巻頭言

古畑任三郎

俳優の田村正和さんが亡くなられた。七十七歳というから喜寿を過ぎたばかり。残念である。田村さんの代表作の一つはなんといっても「古畑任三郎」だろう。私は、和製「刑事コロンボ」を思わせるこのドラマを楽しみに見ていたひとりである。

殺人事件を起こした犯人が、古畑にいつから自分を疑っていたのかと問う場面を私は印象深く覚えている。

「最初にあなたにお会いした時、あなたはスタミナドリンクを飲んで私と会いました。深夜にそんなことをしたら眠れなくなるだろうに。これから来る刑事と対決するために飲まれたんじゃないかと思いました。」

と、古畑は独特の口調で答えた。古畑が最初に感じた違和感、刑事の勘と言ってもいいかもしれないが、古畑のなんとなく感じたことが、その後いわゆる客観的な証拠と相まって、犯人の逮捕に結びついていく。

最近、教育の世界はこの「なんとなく感じる」ことが軽視されているように思う。何らかのデータや数値が、科学的、客観的、と言われもてはやされる。何らかの検査の結果得られる数値をもって、この子はこういう子だと、言われる。教員もそれで納得してしまう。

私は客観的な評価や分析を否定しているのではない。それはとても大事なことだし、子どもをより理解するためや、指導・支援の方策を考える有力な情報であることは間違いない。しかし、毎日子どもとともに暮らし、子どもをいつも見ている教員の「なんとなく感じること」はもっと大事にされていいのではないだろうか。子どものことをいつも考えている教員は、自分の「なんとなく感じること」にもっと自信を持っていいのではないだろうか。「なんとなく感じる」力は、教員の重要な「非認知能力」であると思うのだが。

田村正和さん扮する古畑任三郎は、あなたが怪しいと最初からなんとなく感じた、と言ってのけたのである。

（信濃教育会会長　武田　育夫）

信濃教育

巻頭言

子どもの成長

小学校一年生の教室で一緒に給食を食べるように言われた。給食週間なのである。準備をしている一年生の教室に入って準備の様子を見ていると「おじちゃん、何しに来たの」と女の子に聞かれた。いやいや、私は校長先生なのだ。しかも、入学して三ヶ月もたっているが、まだ私はその子には「おじちゃん」である。

ようやく食べ始めた。すると、一人の小さな男の子が友だちを蹴って逃げていく。先生が席に引き戻しても、すぐに他の子にちょっかいを出す。じっとしていない。先生も大変だ。

それから、長い時が経った。

中学二年生の教室では、川柳を学習をしている。

「ゆっくりと　美しくなる　□□□□」

この空欄に自由に言葉を入れるという学習をしている。ある、男の子が指名をされた。

あっ、あの子だ。小学校一年生の給食の時間、友だちを蹴って、逃げ回っていた、あの子だ。そうか、中学二年生になっているのだ。そして、私は今その中学校の校長をしている。

「ゆっくりと　美しくなる　古時計」

そう書いた。素敵な川柳だ。あの子はこんなに成長したんだ。

私は、その中学校に赴任し、小学校の低学年の時を知っている子たちが、中学生になって生活している様子を様々見てきた。それぞれの場面で「あの子たちがこんなことができるようになったんだ。すごい」と心底思っていた。私は、中学校で担任をやっていた頃「中学生にもなって、こんなことができないのか」といつも子どもたちを怒っていた。「こんなことができるようになった」ととらえるのと「こんなこともできないのか」ととらえるのでは、子どもの見え方はずいぶん違ってくる。結果、かける言葉も違ってくる。長い時間軸で子どもを見ると、子どもの成長のすごさに驚くばかりである。

（信濃教育会会長　武田　育夫）

信濃教育

巻頭言

「ずく」

「教師がずくを惜しまなければいい子が育つものだ」と先輩の先生からよく言われた。

「ずく」というのは長野県の方言である。昭和五十一年に飯水教育会が発行した『下水内の方言』には、「精を出して働く力」と訳されているが、さらに「ずくがある」は「その人の精神的な骨格が確立しており、精を出して立ち働く性根を持っている」と説明している。精神的な骨格とか性根とか、大層な話になってきたが、長野県人は案外しっくりくる説明でもある。

子どものために「精を出して働く」のは、それを生業としている以上当然のことのように思うかもしれないが、そこに「精神的な骨格」「性根」ということが関わってくると、長野県の教師が目指してきた、自らの人格を高めるために修養することや、子どもを畏れるべき人格として尊重し、共に学び伸びようとすることと妙に一致していて、「ずく」という言葉の持つ奥深さや広がりに感心するのである。

信州の教師たちが、「ずく」を惜しまず教育に精を出そうとしたのは、一つには子どもたちに対する溢れんばかりの愛情であり、そしてもう一つは、人が人を育てる教育という営みが一生をかけるに値する職業であるという矜持であったと思う。それは働き方改革とか、能率・効率とかの問題とは、違う次元の問題である。

信州教育の伝統とは、教師が「ずく」を惜しまないことかもしれない。忙しい毎日でも子どもたちの生活記録を丹念に読み、返事を書く先生。子どもたちの素敵な姿を学級通信にのせて広げる先生。家庭学習ノートに書かれた子どもの質問に丁寧に答える先生。そういった先生たちの「ずく」で、信州の子どもたちは「いい子」に育っているのだ。

（信濃教育会会長　武田　育夫）

信濃教育

巻頭言

道草

「道草の日でした。いつも私は下を向いて歩くことが多いので、あまり周りの景色などを見ませんでした。でも今日は、周りをよく見ながら歩くと、きれいな花が咲いていたり、他にもいろんな発見があって、楽しかったです。たまにはこういった日が、あってもいいと感じました。」

私がお世話になった中学校で行われていた「道草の日」の翌日、生活記録に書かれた生徒の感想である。「道草の日」とは、道草をくいながら下校する日。午後三時に学校を出て、五時まで家に帰ってはいけない、という日である。

子どもたちにも、大人にも規制の多い時代である。私が子どもの時のように、川に草の船を浮かべて競争したり、桑の実を食べながら歩いたり、林に秘密の場所を作ったりできにくい時代になった。しかし、多くの大人の記憶に強く残っていることの一つは、学校帰り、道草をしながら帰ったことではないだろうか。暗くなるまで友だちとの話に夢中になったり、川原で魚を捕まえたり、木登りをしたり。

こんなに楽しいことを、なぜ今の子どもたちにもさせてあげないのだろうか。もちろん子どもたちの安全が第一だから、制限されることもあるだろう。だが、大人が知恵を絞り、協力をすることで解決できることもあるのではないか。

社会人が勤務帰りに、喫茶店に寄ったり、本屋に寄ったり、映画館に寄ったりすることを道草とは言わないから道草は、子どもたちだけに与えられたものである。子どもは子どもの時を子どもらしく生きることが一番の幸せだ。それを実現させてやるのが、大人のすべきことなのではないだろうか。

（信濃教育会会長　武田　育夫）

信濃教育

巻頭言

授業改善

大村はまの『教えるということ』という本を読んだのはいつの頃だろうか。ずいぶん前に読んだように思うが、強く記憶に残っているのは、「仏様の指」の話と「禁句『わかりましたか？』」だ。「仏様の指」の話は次の機会に譲るとして、「わかりましたか」について考えてみたい。

なぜ大村はまを思い出したかというと、脳を研究している東京大学薬学部池谷裕二教授の「安易に理解したという感覚を持つと、知識欲を減退させ、思考停止を起こす」いう言葉からである。

大村はまの本を読む以前の私は「わかりましたか」と頻繁に子どもたちに聞いていた。そう問われれば、子どもたちは「わかりません」とは答えにくい。こう問うことは、教師が思い通りに授業を進めるための都合であり、結果「安易に理解したという感覚」を子どもたちに植え付け、「思考停止」を起こさせていたのかもしれない。思い当たる節がある。

教師の仕事は、一人ひとりの子どもの状況をみとり、その子の状況に応じて支援することにある。一律に「わかりましたか」と聞いていてはいけない。そう思い私は口癖のように使っていた「わかりましたか」を言わないように努力をした。結果として私の授業がよくなったか、と問われれば自信がないが、机間指導しながら子どもたちにかける言葉を考えるようになり、わからずに困ってる子どもに以前よりは気づくことができるようになった。

「授業改善」という言葉をよく聞くが、大上段に構えず、案外小さなことから始めた方がいいのかもしれない。

（信濃教育会会長　武田　育夫）

信濃教育

巻頭言

困難を乗り越える

環境や条件がよいからといって、必ずしも学習の成果が上がるものではない

私がこのように考えるようになったのには理由がある。私は伊那北高校が母校であるが、高校の時に聞いた話が印象深く残っているからだ。先生からか先輩からかは忘れてしまったが。私が入学する前、伊那北高校は火災に遭ったようだ。その時の高校生は、教室もなく、机、椅子も満足なものがない中での学習を余儀なくされたが、その年伊那北高校は大学進学率始め、各種の運動大会等で立派な結果を残した、という話である。大学進学率や大会の結果のみが、学習の成果ではないだろうが、時の高校生が悪条件の中、奮闘したのは間違いがない。

先日『伊那北高校百年史』を信濃教育会に贈呈していただいた。九年の年月を費やし刊行された冊子には、詳細に百年の歴史が記載されている。伊那北高校の火災は昭和三十二年。六十余年前である。深夜の出火であったことや、伊那北高校が高台にあることなどから、大火災となり普通教室のほとんどを焼失したようだ。幸いにして火災を免れた体育館に、ベニヤ板で仕切った仮教室を作り、机や椅子は、多くの方々の厚意により提供されたものを使ったようだ。隣の伊那小学校からも机、椅子をいただいたが、小学校の低学年の子が使う机、椅子を高校生が使う状況は、さぞ困難なことであったろう。生徒会は、今まで通りの勉強態度が必要だと生徒会新聞で訴え、互いに励まし合いながら困難に立ち向かったようだ。環境や条件の悪さを言い訳にしないという強い意志を感じる。

昨年来のコロナ禍の中、各学校では教職員や児童生徒の皆さんが、工夫し、協力し、励まし合いながら困難を乗り越え、確かな学びを創り出していると聞いている。高校生の時教えていただいたことは、時代を経ても実践されているのだ。

（信濃教育会会長　武田　育夫）

信濃教育

巻頭言

別れの教育

「『さよなら』『ありがとう』声の限り　悲しみよりもっと大事なこと　去りゆく背中に伝えたくて」

一昨年社会現象にもなった「劇場版『鬼滅の刃』無限列車編」の主題歌「炎」の一節である。主人公が伝えたい「悲しみよりもっと大事なこと」とは何なのだろうか。

太宰治は小説『グッド・バイ』を、唐代の詩「勧酒」に付した井伏鱒二の訳「『サヨナラ』ダケガ人生ダ」を引き、「別離の傷心は深く、私たちは常に惜別の情の中に生きているといっても過言ではない」と紹介している。

また昭和の歌人であり劇作家でもある寺山修司は「幸福が遠すぎたら」という詩の中で「さよならだけが人生ならば　人生なんかいりません」と言っている。

別れのとらえ方もいろいろあるものだ。

学校は、出会いと別れの連続である。毎年必ず出会いがありそして別れがある。先日若い先生たちと話をする機会があった。「先生になってよかったと思うときはどんなときか」の問いに、ある先生が「卒業式で今までの大変だった思いが報われたとき」と話してくれた。苦しいこと、辛いこと、悲しいことが多くあったが、卒業式の日、子どもたちからの言葉や涙や笑顔でそれらすべてが流れてしまう。よくわかる話だ。そして一週間もすると、また新しい子どもたちの前に立っている。そう考えると、別れがあるから出会いがあるのかもしれない。

私が若い頃、ある学校でお世話になった校長先生が「別れの教育が大事だ」とよく話をされた。「別れの教育」の意味はよく分からず、そういうものか、と思っていた。今でも「別れの教育」がわかったとは言えない情けない私であるが、去りゆく子どもたちに「悲しみよりもっと大事なこと」を伝えることができる大人でありたいとは思う。

（信濃教育会会長　武田　育夫）